

はじめに

新型コロナウイルスの脅威は、たった数か月のうちに世界中の全ての人たちに対して社会的、政治的および経済的に甚大な影響を及ぼし、これまでの習慣や社会常識を根本から見直すことを私たちに迫っている。この困難な時期を乗り越えれば、私たちは新しい考え方や生き方を実現できるかもしれません。

自然界と共生できる社会の構築を目指す会員の方やその他初めての方から当所にも多数問い合わせが届いている。それらの質問に答えるために「静電三法」を読み返した。

改めて読み直すと自然界と共生できるヒントが沢山書かれている。例えば、自然界の潜在勢力を活用し、農薬、化学肥料を多用することのない農業技術としての**植物波農法**、物質の外部環境の静電的條件を変化させることにより物質の諸性質を極めて省エネルギーで変えることのできる**物質変性法**、環境の電気と人体の電気現象のかかわりから本当の健康体をつくる建設医学を提唱する**人体波健康法**。これら三つの法則の中に、新しい考え方や生き方を実現できる様々なヒントや答えが埋まっている。

「静電三法」は敗戦の混乱を引きずっていた時代、自然界の仕組みを見抜き、自然界と共生するための知恵や工夫をまとめ 1958 年に「静電三法・技能専修員用テキスト」として発刊された。

今、この時代にこそ、一人でも多くの方々に本書・「静電三法」を真剣に読んでいただきたい、また、このような素晴らしい本を残していただいた榎崎先生のことをもっと皆さんに紹介したいと感じた。

実践者の声の“第 1 回”でご紹介した「松原喜一様」の取材時のシーンが蘇った。取材の折見せていただいた榎崎先生の写真を皆様に是非ともご紹介したいとの思いから、富山県南砺市にある松原様のご自宅に電話をかけてみた。松原喜一様のご長男の喜代嗣様が出られた。喜一様は既に 7 年前にお亡くなりになり、現在は、奥様のご自宅を守っておられ、喜代嗣様は神奈川県の藤沢と富山県の福野を往復してお母様のお世話をされていると伺った。

元もと、電気、電子を専門として活躍してこられた喜代嗣様は「静電三法」や「カタカムナ」にも興味を持たれ、5 年前から藤沢と福野との往復の時間に、お父様の喜一様が残されたカタカムナについて独自で勉強を始められたとのこと。

喜代嗣様とのメールの交換を進める中、先にお電話でお願いしていた榎崎先生のお写真数十枚を快くお送りいただいた。14 年前の取材時にお見せいただいた昭和 30 年代初めに富山県、福野町での講演前後の榎崎先生の温厚な笑顔や表情豊かな講演風景が届いた。

実践者の声第 11 回となる今回は、松原喜代嗣様にお父様（喜一様）の思い出と共に榎崎先生が富山でご講演された様子などを写したお写真の背景などを綴っていただいた第 1 章「父が残したカタカムナ」及び現在進行形のカタカムナ解説について第 2 章「カタカムナのサトリの考察」について記載していただいたものを皆様にご紹介したいと思う。

2020 年 5 月 30 日 榎崎研究所 編集 大塚啓恵

- ・第1章「父が残したカタカムナ」
- ・第2章「カタカムナのサトリの考察」



## 第1章「父が残したカタカムナ」

不思議な書き物に出会ったものである。

平成25年に、父、喜一が亡くなり（2013年6月14年）、一周忌も過ぎ、2014年8月15日のお盆に芳賀氏と花田氏が父の供養にお参りになった。初めての面識であるが、何やら、父に生前、富山市で、故檜崎阜月（ならさきこうげつ）先生の事についての講演をお願いしたとの縁だそうであった。その時、父の持っていた重要なもの（カタカムナの写し-B4版）らしいが、出来たら、譲り受けたいとの事、父は「それは重要なものであるから、奥の金庫にしまっている。」と言い、奥まで取りに行ったそうである。家には金庫はないし、家の中を見ても、それらしきものは、整理した中からは出てこなかった。奥だとすれば、蔵か二階の父の寝室であろうが、ほとんどを見ている中では、気づきはしなかった



芳賀氏は神官だそうであるが、お会いしたその時は多分、相似象の植物波農法で知り合った人なのかと思ったが、良く話しを伺っていると、どうやら、「カタカムナ」の事であることが分かって来た。父とはカタカムナの話をした事もなかったが、父が相似象学会で二冊の論文本を出していた事は生前にももらった本で知っていたし、家にも数冊残っている。

昭和20年の後半か30年の初めの頃と思うが、年少から、小学校の低学年の頃と思う、父が家で静電気と称して、家族の全員や、お米の種を、ガイシで絶縁した3畳ほどの大きな台上にブリキ板を乗せ、その上に毛布をひき、ブリキ板に静電気という器具から3000ボルトの電圧をかけ、その台の上で30分ほど座ったり、寝転んだりしていたような思い出がある。検電器というペンで身体に電気が加わっている事を確かめていた。

このようにする事で、身体の健康が保たれる、又、お米も良いものができるということであった。

屋敷の敷地内に、大きな穴を掘り、1mくらいの深さのところ  
に炭を埋める事で、その効果として屋敷の周りが良い場所になる  
(イヤシロチ化) という事、又、田圃の土手に大きな金網を立て、  
アースする事で、その網を通る空気が良くなり、稲の出来が良い  
との事で、近くの村の農家でも一緒に実践されていた事を覚えている。これが、檜崎先生が教えられていた農法の一つである事を、そして、それが、カタカムナに由来するものである事は最近まで知らなかった。

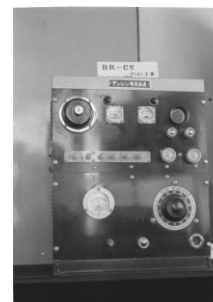


自分自身も電気、電子が専門であるから、また、最近の医学の研究の話の中から、効果がありそうな事は理解できる。身体の電位が乱れると病気になりやすいのはわかる。

父は全国各地に植物波農法での知り合いが多いようで、山形からはワインが送られてきたり、豊田のH氏、S氏とは特に親交が深かったのか、今でも、年末に、野菜やバラが私宛に贈られて来る。どれ程、この学会に関わっていたのかは分からないが、檜崎先生の直弟子とかいうことで、北海道や富山で講演を頼まれていたようである。檜崎先生は福野の西方寺でも講演され、我が家の広間でも説明されていた事を、子供ながらの記憶にある。



父が亡くなった後で、神奈川県から8月のお盆の休みに、若い20代後半の農業に携わる青年2人が車で、わざわざ、父の話を知りたいと訪問してくるほどで、これには、大変に驚いた次第である。



このような事から、少し、相似象の事を知りたいと思い、父が残した学会誌を読み出した。宇野多美恵という女史が責任者で相似象学会と称して、女性の為に発会したもの様であるが、檜崎先生の解釈を伝えている内容で、宇宙の事から始まり、万物万象のすべての根源について書かれているものであり、初めて読むと、カタカムナ用語や物理の説明はサッパリ判らずの内容である。ただ、部分、部分に父が付箋を付けたたり、線引きがあつたりで、父も少しは読んでいたのかと思った。全部で16巻もあり、他にも「ゲーテのファースト」についてや、「感受性」について等の別冊本もあり、全巻揃ってはいないが、大部分の学会誌が大事そうに本箱に並んで置いてあった。



又、学会誌以外に、カタカムナの説明をする本も何冊かあった。(宇野多美恵女史が会誌の中で、出版された本の内容に批判をしている著者、深野一幸博士の本もあった。) 不思議な事に偶然ではあるが、深野一幸氏の講演を、自費で入会していた全経連の講演会で聞いた事があり、当日、話の内容に感動を覚え、出版本を購入して、その本にサインをしてもらった。その中に檜崎先生の事が書いてあり、びっくりして父に渡したことがある。(宇野女史によると、深野氏のカタカムナを説明した本は、解説のレベルを下げ、靈的な神とか、神秘性で述べられている事で、カタカムナを靈的神秘思想的な事のように紹介していることが、本来のカタカムナ解説と違うという事であるらしい。)

2015年頃から、藤沢と福野を往復する新幹線の中で第1号から読み出した。又、覚えられない言葉が多く難しいので、重要と思われる部分をノートに写し始めた。

そこから知った事は「カタカムナ」とは日本人の祖先の人たち(上古代、数万年前に、日本列島に居た人たちが、直観力にすぐれ、宇宙、天然の真理を感じ取り、言葉を作り、その真理(コトワリ)、ヒビキを図象で表したものである。日本語の48の音(戦後改訂し、現在は46、旧仮名遣いと言われる2字エとオを外した)を図象で表し、それらを組み合わせ、言葉や文章として80首のウタで示した渦巻きの図象である。

相似象学会では日本語のカタカナの元であると断定している。(カタカムナ→カタカンナ→カタカナ)。確かにそのような可能性がある。

読み進むにつれ、檜崎先生や宇野多美恵女史はすごいと思うようになった。このウタヒを解説するなど、世人には出来ない。又、宇野女史を後継者と選び、その先生の遺志を30年にも渡って受け継ぎ、自身の理解も深めて解説、解説を続け、軽井沢で焼死(たまたまテレビニュースで見て知ったのも不思議)された宇野女史にも敬服する。自分には何か不思議な共時性とか、縁という様な事が、数多くあり、同期性、共振性と言えるものが強いのかもしれない。(カタカムナによれば、それも相似象で説明できるらしい)



父が残した本であるが、読まなければ、何のこともなく、過ぎ去ってしまったであろう。一号、二号、・・・と読み込んでいく内に、自分も電気を専門とする技術者であり、理学系であることから、檜崎先生の解説に何となく共振するものがあった。又、ボーイスカウト運動を通して、自然や、ベーデン・パウエル卿の言う事にもカタカムナの事があり、宇野女史の言う、宗教観(仏教、儒教、キリスト教、ゲーテ、孔子、釈尊の教え等)とカタカムナのサトリとの解説にも、今までに色々な本で知り得た仏教や道德倫理の知識からも、納得するものがあり、最後まで、このカタカムナの相似象学会誌を読み通して、何を伝えたいのか追及してみたくなった。

宇野女史の解説は初期の号では、繰り返し同じ事を説明されており、中々、結論的なサトリには至る説明ではなかったが、第十号からは、檜崎先生の死去もあり、宇野女史自身の経験と共に、語り始められて、少しずつ解る様になってきた。一年半近くも読んでいた為、なんとなく、理解が深まり、カタカムナに共振し始めたのかもしれない。

第12号に共振波動という言葉が出てきて、色々な事がこの言葉で合点できることに気づいた。宇野女史の言われる事を、カタカムナの真の理(サトリ)と思うか、それとも、偽のものと思うかは、人それぞれであろうが、これだけ、理路整然と一首から順序よく述べられているとすると、カタカムナは本物と思える。

古事記、日本書記(記記)の神話に出て来る神々の名前も、カタカムナの80首のウタの中で言葉として出ている。古事記には、三神(アマノミナカヌシ、タカミムスビノカミ、カムミムスビノカミ)が現れ、その子孫のイザナギ、イザナミが国創りをし、色々な名の神々を生み、山々や海など司る神として書かれているが、突然、それらの神々の名が出てきて、それぞれの神名の説明は殆どない。しかし、カタカムナでは、それぞれの神々の名は、はっきりと意味をもった言葉であり、いかに、現象や物質、生命質、万物万象が創り出されかの過程を物理として示されている。

とすれば、伝承として伝わっていたこれらの事柄を、「その意味も良く解からずに後代の人々が神々の名として、なんとなく残っていたそれらしい雰囲気、中国から伝わった漢字に置き換え、当てはめたのでは?」との推察も納得できるものである。現代でも、土地の風習として土着の行事があるように、伝え話が残っていたと思われる。

日本語の起源がこのカタカムナにあるとするのも頷ける。 図象の創り方にも道理があるし、48の日本語の思念も難しいなりに、ある程度納得できるものがある。言葉の前に声音があり、その声音の組み合わせが言葉になったという事である。

今、まだ、第十一号のウタヒ第10首まで読み進んで、完全ではないがその中で重要と気づいた事を、忘れないように、又、気に留めた事柄や解説を書き記して置く事にする

平成29年8月19日

松原喜代嗣

## 第2章「カタカムナのサトリの考察」

5年も相似象を学ぶと、どんどんと知りたい世界が広がり、仏教、古事記、日本書紀、古語拾遺、日本古代史、老子、気など、檜崎先生と宇野女史の説明の中のものを、より深く、とめど無く知りたくなり、現在進行形です。

相似象を学び始めて、色々なものを読みながら、時とともに、点の学びから、線の学びへ、更には面へと繋がっていく気持ちがあります。

檜崎先生が物質文明の軌道修正運動を企画し化成会と称し、奉仕活動として無我共同体を盟約、同志が主役として、檜崎先生のみが代表者として名を表に出され、その成果を日本の物理学として発表された。

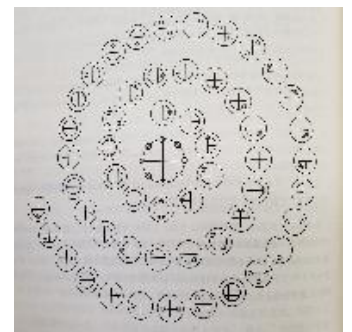
その日本の物理学と題する檜崎先生の講演録、第1回から8回までの再録らしきものがあり、最近これを読み理解すると、相似象会誌の創刊から3号までは、この事をまとめたのであろうと想像できるものであった。会誌第4号、5号も関連しているが、むしろ、そちらは記紀やその他の古文書も影響しているように思います。

この相似象は、潜象物理が重要な事にも係らず、カタカムナというヒビキに魅せられ、カタカナや日本語の語源、神道の源、言霊、数霊などなど、最も重要な事が余り語られずインターネット上にて変遷しています（カタカムナ流に謂えば当たり前かもしれません）。

檜崎先生の名のみが恒に出てきますが、星 一氏（星製薬社長、参議院議員）が最も重要な役割を果たしたと思います。この方の支援がなければ、カタカムナとの出会いもなく、化成会の発足もなかったと思われます。

世の中のカタカムナは、第5首と6首を主に引き出し、カタカナや日本語語源のみを強調していますが、本当は、もっと大きな天然自然を語らなければならないのだと感じます。第13首、14首などは古事記にある神名ばかりです。インターネット上でも正しく伝えようとされている方もありますが、言葉は難しく、カタカムナの専門的な内容となっており、かなりの知識が必要です。宇野多美恵女史の言われる感受性を高める鍛錬をどのようにすればとよく考えます。

「アリガタイ」「オカゲサマデ」の日本語などには、感受性を高める＜カタカムナ＞潜象の思念があるようにも感じます。繰り返し会誌を読むと、段々と共振してくると、宇野先生は述べられていますが、まさにその様に思います。カタカムナはスケールが大きい、又、人生訓になるものだと思います。



カタカムナの真とは何か？ 自分なりの理解は深まってきて、一番重要な事は、すべてが天理の＜ヒトツカタ＞（相似象）である、すべては天然理で“生かされている”この一言ではないかと思いません。

その天然理を檜崎先生は8の理があると理解され、説明されています。

この事を理解して、人は生きるようにする、それが<カタカムナ>のサトリであるように思います。  
すべてはこの8の理の派生の相似象であると。

檜崎先生は潜象の物理学から示し、宇野多美恵女史は論語、仏教などの人生の理から解説を示されているように思われます。それぞれ専門的知識のバックグラウンドの違いがあり、それ故、説明の仕方も違っている。

天然自然には8つの理がある。

#### 1. 天然自然の理には、まず“正反4相”の律がある。(正対称性とひずみ性)

すべてに正反があり、またその正反にも正反がある。つまり4相があると云う事である。

良い、悪いと謂われる事にも、良い中に良い、悪いがある。誰でも頷ける道理である。

経済もしかり、例えば、株1つ見ても、上昇、下降があり、上昇の中でも上がり、下がり、下がりの中でも上下がある。上がり続ける事もなければ、下がり続ける事もない。

うれしい事の中にも悲しみがある。それ故、状況を常に把握する事が大事。

#### 2. 第2は互換重合の理である。

相反する状況がお互いに変わったり、又、重なり合ったりするという理である。

例えば、電気は磁気と力によって電気性が出る。又、電気が流れる事により、磁気性が、電気と磁気によって、力が出る等、ここには互換と重合によって、それぞれ変化している。

(フレミングの右手、左手の法則)

時間と空間により、速度というものにも変わる。膨張と収縮、粒子性と波動性など、相反する性質が天然自然(アマ始元量)には存在するが、これらも互換重合によって別の形に変化する。

時間も空間も粒子性を持つという事である。どこまでも小さくしていくと時間も空間も粒子になる。

光も電気との互換重合がある。(光から電気、電気から光)

人の生命も、食べものを取ることによって、元素転換している。

#### 3. 第3は対向発生という理である。

正と反が対向すると新しいものが発生する。究極は天然自然の潜象と現象の対向であり、これによってすべてのものが発生する。

物質、生命質は<カムナ>と<アマナ>の対向による。言葉にはその示しがある。

発生、存在、親和希求、排斥思念はこの対向発生の結果である。

宗教もしかり、天然に対向しての考え方である。何故なら、すべてが天然自然から発生しているからである。

#### 4. 第4に同種反発、異種親和の理である。

この理は説明するまでも無く、正と反は親和し、正と正、反と反は反発するという。

電気、磁石、力、雌雄など、2極は親和し、同極は反発している。

人間も利己心で反発、したり、意見があうと意気投合する。恋愛、離婚もこの相似象

#### 5. 第5に変遷律という理である。(統計的存在性)



マクロ的に見れば一定で、固定している様に見えるが、ミクロ的には絶えず変化している。仏教で言う、諸行無常、常に物事は変化している。発生、分化、変遷、還元である。お経で有名な“般若心経”もカタカムナで読み解くこともできる。人であれば、新陳代謝（ミクロ）、マクロ的には誕生、成長、死と続く。すべてに固定的なものはない。経済もしかり。宇宙、地球、世の中の歴史もしかり。

6. 第6に微分統合の周期性という理である。

分化して、小さくなる性質と、まとまって統合して大きくなるという性質である。個々性と統合性である。一人一人とグループ等もこの理の相似象で、相反する性質が同時に存在する。日本語の<イチ>、<ヒトツ>にも、微分、統合の思念がある。どこまでも、小さくヒトツとなる意と、大きくまとまりヒトツとなるという思念 イッチ（一致）などという言葉もある。（オホトノヂオホトノベ）

7 第7は 回転、巡回、螺旋という回転性の理である。

宇宙から、電子まですべてが回転している。回転するからエネルギーが生じるのである。エネルギーが発生するので、生命が発生する。

8 第8は極限、飽和、循環性の理である。

8という数で飽和する。<ヤシマ>のサトリ 飽和と不飽和はすべては8の飽和へと移り、極限まで行き、循環サイクルへと続く。生成（発生）、成長、極限（飽和） すべてのは発生から飽和極限まで成長し、崩壊して元の状態に還元する。

ちなみに、声音符の形から自分なりに“カタカムナ”のウタヒ第5首、6首を解釈すると、上記の天理を示していると思う。このウタヒを基本に、第7首以後の「カタカムナのウタヒ」は天然理を詳細に説明しているものと思います。

人それぞれ、解釈は違うかもしれませんが、自分のものを示します。

「ヒフミヨイ」	「ヒ」から発生分化変遷して現象にでる。
「マワリテメグル」	間に「ワ」から分離して出てくる「マリ」は回転している 回転・循環・螺旋の回転性を示す。
「ムナヤコト」	立体化しながら、極限飽和安定して、マに統合戻っていく。 極限安定・還元性
「アウノスベシレ」	現象に発生・変遷していく方向性をしめす 互換重合性
「カタチサキ」	統合分裂して粒子となる。 微分性
「ソラニモロケセ」	「ヒ」との対向で多種多様に発生・増殖する（「ヒ」以外の小円がある） 対向発生性
「ユエヌオヲ」	4相性をもって万物万象の生命核となる。 4相性
「ハエツキネホン」	正反性を持つので、異種反発、同種親和しながら重合していく根本は



「カタカムナ」 「カ」から「タ」した「カムナ」である。

まとめれば

「ヒフミヨイ」 は 「マワリテメグル」 の物理

「ムナヤコト」 は 「アウノスベ」 (フトマニ) の物理

「ソラニモロケセ ユエヌオヲ」 は 「イカツ」から様々の現象の形態に、どの様に進展するかという  
実際の状態の物理

「ハエツキネホン カタカムナ」は 正反に枝分かれしていく万物万象の生存の根源の大本は  
「カタカムナ」である。 という宣言

日本語の成り立ちもあるかもしれないが、天然理を48個の声音符で示している。

これらの8の理に従って、生活していく事が重要である。

現在の<カタカムナ>についての感じ方、考えている事で考察しましたが、より深い理解が必要であろう  
と思います。 抽象化、言葉化するのは大変難しい。

令和2年5月  
松原喜代嗣

#### 【編集後記】

檜崎研究所が開所され、初めての取材先として檜崎先生の直弟子の松原喜一様に決めたのは、当時、まだお元気であった宇野多美恵様のご紹介によるものだった。

取材の願いを快くご了解いただき、2006年(平成18年)11月22日と、23日の両日、富山県南砺市の福野町に出かけてお話を伺った。

檜崎先生に係る愉快的エピソードや、当時何千匹と飼育していた養豚の事業化、松原様他7人のグループで植物波農法の生産について様々な議論を交わしあったお話など、夜中まで目を輝かしてお話いただいたのを、ついこの前のことのように思い出せる。

そして、この度は、松原喜一様のご長男の松原喜代嗣様に、突然、お電話をさせていただき檜崎先生のお写真をお借りしたいとの依頼から始まった。当所からの無理な願いを快く受け入れていただき、実践者の声・第11号へ掲載の運びとなった。

松原喜代嗣様には、心よりのお礼と感謝を申し上げます。

2020年5月30日  
檜崎研究所 編集部 大塚啓恵